

クルーズ船で来る外国人観光客

● 放 眼 日 中



昨年11月に高知県に行った。高知市に入るのは生まれて初めてで、高知城や桂浜などに歴史を訪ね、竹林寺で美しい紅葉を見ることができた。ただ、東京辺りから見ると、何といつても遠い。そして四国他県と異なり、格安航空会社（LCC）の参入がなく、まだまだ飛行機代が高いという印象は拭えなかった。

市内中心部、高知城の横にある「ひろめ市場」は地元の人もお薦めの食事場所だと聞き、訪ねてみた。昼時ということもあり、大勢の観光客がカツオのたたきなどの名物に舌鼓を打ち楽しそうにしていたのだが、彼らが話す言葉はほぼ中国語だった。中国の田舎から出てきたと思われるおじさん、おばさんは、相変わらず大声で話すので、よく分かる。ただ、一方で40歳以下とみられる中国人は、店員とお互い片言の英語でコミュニケーションを取ろうとし

ていたり、翻訳ソフトを使って、欲しいものを提示したりと、従来のうるさい中国人団体客とはちよつと違って見えた。われわれに席を譲ってくれた親子連れもあり、この地方都市で日中交流を垣間見た。

彼らの目的は完全に買い物と食事。「これだけを楽しみに数日の船旅に出ってきた」と、両親を連れて山東省から来たという女性は話してくれ、2000〜3000円もする定食や刺身を次々に買い込んで皆で食べていた。

近くの和菓子屋でも、女性たちで行列ができており、売り切れる品物も出ていた。地元の商店やレストランに観光客が押し寄せるだけに「クルーズ船が来る日は売り上げが上がるので、もつと来てほしい」と歓迎ムードだ。

彼らが乗って来たクルーズ船は「ノルウェージャン・ジョイ」とい

う船名で、宮崎から来て上海に戻るものだった。高知での停泊時間は午前8時から午後5時の9時間、定員は3883人となっている。このわずかな滞在で、3000人ももの中国人が地方都市に活気をもたらしている現場を見ると、確かに大都市中心の観光政策では限界があると感じる。ちなみに、高知港にクルーズ船が入船するのは年間40回、月3〜4回ペースだそう。

2017年の訪日外国人数は、2800万人を超えたという。内訳は中国人735万人、韓国人714万人、台湾人456万人、香港人223万人。この東アジア圏の合計だけで全体の4分の3を占めている。20年の目標値は4000万人に倍増され、その陰に隠れてあまり知られていないが、政府は「訪日クルーズ旅客を20年に500万人」という目標も実は掲げている。

17年のクルーズ船入国者は約250万人。博多、長崎、那覇などが高知のように多くの地方港に外国人観光客を乗せた船が寄港し、落ち込みの激しい地方の活性化につながるのであれば、ぜひ進めるべき政策ではないかと思う。

あまり目標人数にとらわれることなく、心のこもった地方での交流を楽しんでもらいたい。その上で、経済効果も期待できるということ、各県が力を入れているのもよく分かる。

ただ、出会った男性の一人は「もし次回日本に来ることがあれば、クルーズ船ではなくぜひ個人で来て、もつと自由な旅がしてみたい」と本音をのぞかせた。これからは団体人数を伸ばす時代ではなく、個人を、そしてリピーターをいかに満足させるかも当然の課題だ。



コラムニスト・アジアソウオッチャー 須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。